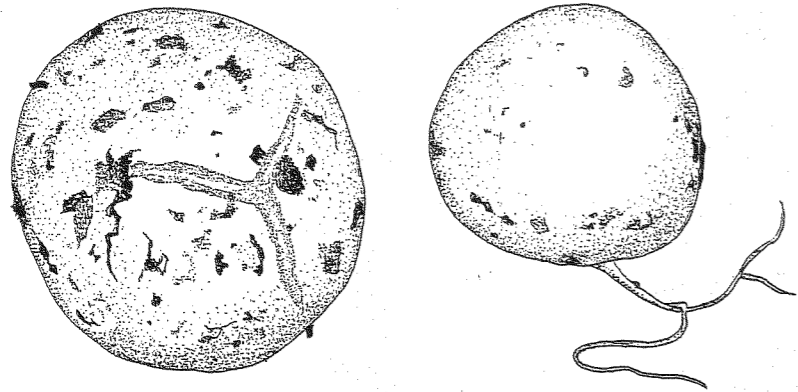


# はり ま たん けん 播 磨 探 検

2019.11.18 290号  
ええ 赤松弘一



スッポンタケの幼菌 直径60mmと40mm  
細い根のようなもの(根状菌糸束)がついている

しきキノコ)が8本、ヤマドリタケモドキ(かな?)1本、そして希少なハツタケが1本収穫できた。「わははは、みんなタダ!」キノコの毒に当たったわけではないが、うれしくて笑いが止まらなかった。早速その晩、みそ汁に入れて食べたが当然うまかった。

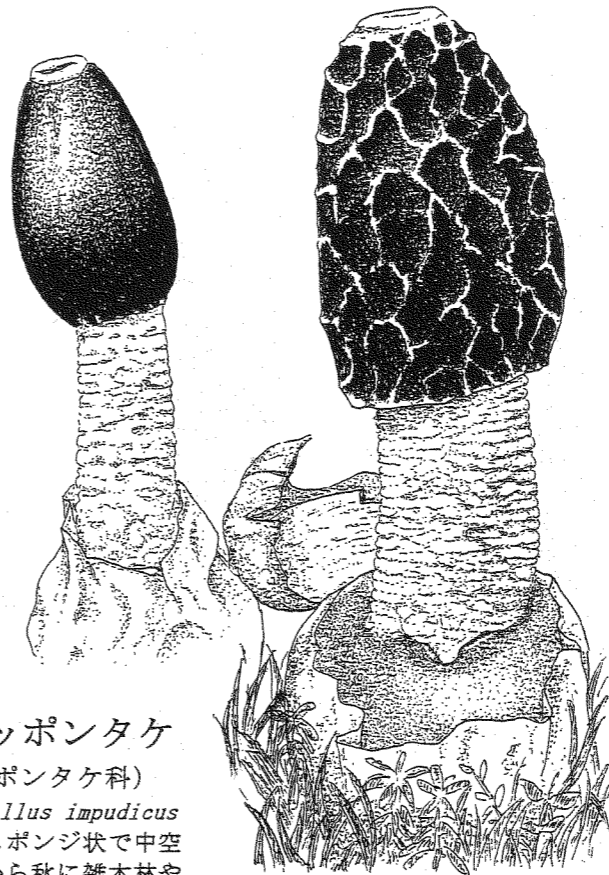
このキノコの採集中に、雑木林の中で不思議な丸い玉に出会った。そいつは白くてテニスボールのような弾力のある球体で、落ち葉の中で3つがまとまって見つかった。直径は4~6cmありずっしりと重い。その1つは細く白い糸状の根のようなもので地面とつながっていたが、他の2つにはそのようなものがなく、地表にころりんとコロがついていた。以前、明石公園で全く同じような物体を見つけたことがある。そいつは白い袋を破って中からゆで卵のような白いキノコが出てくる途中であった。おそらくタマゴテングダケなどの猛毒キノコの卵(幼菌というらしい)であったと思われる。今回もその仲間の幼菌ではないかと思い、出てくるキノコを観察するために2つを採集し持ち帰った。

大きい方の表面には3裂した裂け目があり、中にゼリー状の物質が詰っていた。「おおっ、こいつはもう明日にでも出てきそうだ!」私はこの卵を庭のコケの上にそっと置き、陽射しと雨避けの段ボールの箱をかぶせておいた。翌朝の出勤前に「出たか?」と箱をどけてみたが、変化はなく、若干しぼんだ感じだった。以来2週間、ますます卵はしぼんでいき、色も薄茶色になってきた。「あかんか…」ついには2つに切断して中を確認するか!とも思ったが、「明日を信じて…」我慢した。11月10日の早朝、あまり期待せずに箱をどけた私は仰け反り叫んだ。「おおっ!スッポンタケが出た、デカイ!しかも2本!!」

実際に見るのは初めてであった。2つの卵(幼菌)が、2週間後の同じ時間にそろって発芽?したのが非常に不思議だった。キノコは菌類であり、普段その本体は腐った木や腐葉土の中に菌糸という白い糸状の物体として広がっている。ある時期になると次の世代を残すために菌糸が変化し、胞子をつくる器官(子実体)が形成されてニョッキニョッキと地上に現れる。これがキノコであり、この傘から胞子が風に飛ばされたり、虫に運ばれたりして、分布を広げていくのだ。驚愕のスッポンタケのその後を次に紹介する。

秋の味覚として欠かせないキノコを採集するために、我家のある高砂市北部の山やため池周辺を探したが、ほとんど収穫がなかった。「このままでは冬を越せないぞ」という不安を感じた私は、10月末、加東市のとある森を訪れた。運よく、公園の遊歩道や周辺道路沿いの松の木の下で、シバハリ(アマタケ)を50本以上、ホンシメジ(ら

## 驚愕のスッポンタケ試食顛末記



スッポンタケ  
(スッポンタケ科)

学名 *Phallus impudicus*  
柄はスポンジ状で中空  
初夏から秋に雑木林や  
竹林に見られる

その朝、庭の段ボールの箱をどけた私は、驚いてのけ反ったが、すぐさま自然の驚異と生命の不思議への感動を簡潔な言葉で叫んだ。

「出た!出たがな!」

薄い褐色に変色した幼菌の袋が破れて、「によっきり!」という感じでみごとなスッポンタケが伸びていた。大きな卵からは太くて大きなものが、小さい方からは小ぶりのキノコが現れた。図鑑で見た通り、暗緑色の帽子をかぶった不思議なキノコだ。

別々の2つの幼菌から、どうして全く同時にキノコが出てこれたのだろうか。幼菌ができた時から、きっちり何百時間後にキノコが出るようにプログラムされ、カウントダウンされていたのか?もしくはキノコが発生するのに最適な気温、湿度等の諸条件がこの日の朝にそろったので、発芽のスイッチが入ったのか? 謎である。

スッポンタケはキヌガサタケなどと同じく、幼菌の時代は球状である。キノコが幼菌の袋から伸びて出た後

にはこの袋はキノコの柄の付け根に「つぼ」として残る。先端の傘の部分には網目状の凹凸があり、べっとり暗緑色の胞子の糊状ペースト(グレバ)が付いている。ここから強烈な悪臭を放ってハエを呼び寄せるのだ。ハエはグレバの胞子を舐めとって他の場所に運び、胞子を広い範囲にばらまく手助けをするのである。

前に、初夏の竹藪に発生したキヌガサタケに出会ったが、そのグレバにびっしりと小さなハエがたかっていた。ハエがグレバを舐め取り、傘がすっかり白くなっていた。今回は11月で気温が低かったせいか、ハエは来ていなかった。グレバの匂いを恐る恐る嗅いでみたが、この種のキノコに特有のウンチや腐肉の悪臭はせず、強いカビ臭が感じられた。

10月末に森の中で幼菌の卵を見つけてから、この日まで丸2週間が過ぎていた。手を付けずに森に残してきた一番大きな卵も、やはりこの日に発芽したのだろうか。

手持ちの図鑑には「スッポンタケ 可食」と記されていたので、「こいつを食ってこそ真のキノコハンターだ」と使命感に燃えた私は、スッポンタケを試食することにした。見るからに食欲を減退させるグレバを避けて、純白の太い柄の部分を手で5cmほど切って茹でた。昼食につくった自家製チャーシューメンに入れて食してみたが、少しカビ臭いのが気になる。味は無いが食感はしゃきしゃきとしていて菌切れが良い。結論からいえば「こりゃうまいわ!」ということはなく、男が上がるということもなかった。